

## 7) スモモ=李

スモモはバラ科の落葉小高木スモモ類の総称で、世界には約 30 種類が分布し、原産地は中国、果樹として世界の広い地域で栽培されている。樹高は 3~8m に達し、葉は細長い楕円形で、互生して先がとがる。春、新芽に先がけて、長い花柄のある花径 2cm ほどの 5 弁花を、数輪かためてつける。花の色は白または淡紅色で、果実は 6~7 月ごろに黄色または赤紫色に熟し、強い酸味は完熟すると甘くなる。和名の由来は酸味が強いため酸桃(スモモ)になったとも、桃に似ているが果実に毛がないために素桃(スモモ)になったともいわれている。学名は『*Prunus salicina*』で、属名はスモモのラテン語名、種小辞は「柳のような」という意味で葉を形容している。イギリスでの呼称は『Chinese plum』、『Japanese plum』、『prune』(プルーン=西洋スモモ)などであるが、プラムの収穫期が 7 月から 8 月ころであるのに対して、プルーンは 9 月になってからである。また中国名は『李』である。

現在世界で栽培されているスモモには、中国の揚子江流域を原産地とするニホンスモモ、カフカスからカスピ海を原産地とするセイヨウスモモ、アメリカ大陸を原産とするアメリカスモモなどがある。このうちアメリカスモモは果樹としての品質があまりよくないため、主に鑑賞用として栽培されている。これに対して西洋スモモはローマ帝国の書物にも登場し、その長い栽培の歴史を物語っている。またニホンスモモにはソルダム、サンタローザ、ホワイトプラムなどのほか、果実が大きい巴旦杏(ハタンキョウ=牡丹杏ともいう)などがあり、より糖度の高い、また収穫効率のよい品種が次々と開発されている。ただスモモは自家不和合性が強く、別に受粉用の樹を植える必要がある。このため、実生り用の開発と合わせて受粉用樹の開発も進められており、ハリウッドと呼ばれる品種はその一例である。日本での生産高は山梨県が 3 分の 1 を占めており、次いで和歌山県、長野県となっている。

中国での李の歴史は古く、紀元前 8 世紀ごろ周代の『詩経』にまで遡ることができる。この中に『丘中有麻編』(キュウチュウユウマヘン)と題する王風の詩があり、「李は、徒(イダラニ)能く人口を悦ばしめて、以て人を濟(ス)うに足らず。」と記されている。また唐代の李白は『春夜桃李園に宴するの序』において「夫れ天地は萬物の逆旅(ゲキョ)にして光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢の若し。歡を為すこと幾何(イバク)ぞ。〈中略〉桃李の芳園に會し、天倫の樂事を序す。群李の俊秀は皆 惠連為(タ)り。…」と記している。日本でも李の歴史は古く『日本書紀』の「推古天皇紀」には、「李みのれり」との記述があり、奈良時代かそれ以前に中国から伝わったものと思われ、『万葉集』には大伴家持による以下の歌があり、すでに栽培されていたらしい。

わが園の李の花か庭に落(フ)る はだれのいまだ残りたるかも

李は生食や果実酒にする他、ジャムや砂糖漬け、乾果などにも加工される。李酒は貧血、不眠症によいとされ、生葉を浴湯料にすると汗疹に効くとされている。



スモモの花。なんとなくピンクの花をイメージしがちだが、果実の花はモモやアンズなど、一部を除いて、ほとんどのものが白い花を咲かせる。サクランゴも同様である(長野県佐久市)。



スモモの果実(長野県佐久市)



スモモの若い果実？（埼玉県深谷市）。



近縁種のプルーンの果実、味はソルダムに似るが、果実はやや小さい。果実は甘く左党派にはちょっとこたえる。次に紹介するプルナスぐらいがちょうど良いかも(長野県佐久市)。



近縁種のプルナスの果実、スモモよりも酸味が少ないがプルーンよりも酸っぱい。

[目次に戻る](#)